

## 書評：『ベーシック アジア経済論』 坂田幹男著（晃洋書房、2013年）

裴 光 雄（大阪教育大学）

本書は「40年以上のアジア経済研究のキャリアを積んできた」坂田幹男教授が「アジア経済の入門書という意識のもとで執筆した」と言われるように、テキストであるが、専門書としても十分に読み応えのある労作である。

著者は「はしがき」の冒頭で、「本書はアジア経済を学ぶ人のために、できるだけ平易な言葉で、可能な限り全体像を浮かび上がらせることを心がけながら執筆した入門書である」と述べている。評者も本書を読んで最も驚嘆したのは、東アジア経済に関して、これだけ見事に全体像を良く描けるものだ、という点である。

では、どのような構成で本書が編まれているのか、記せば以下の通りである。

- 第1章 東アジアの成長をどう捉えるのか
- 第2章 東アジア経済発展の光と影を考える
- 第3章 東アジアの成長と日本
- 第4章 中国の「社会主義市場経済」を考える
- 第5章 ASEANの発展と地域統合化の展望
- 第6章 北東アジアの地域経済協力を考える
- 第7章 東アジアの地域主義と日本の選択
- 終章 アジア経済はどこに向かうのか

著者は同じく「はしがき」で「本書では、できるだけ東アジアの全体像を把握することができるように、光と影の両面を映し出すことに苦心している」と述べている。だが、東アジアの経済発展の過程と現状を光と影の両面から単に映し出すことによって、全体像が生き生きと描き切れるわけではない。そこには書き手が国際経済学と開発経

済学の精緻な理論を習得しており、適用し応用できる学者としての力量を有していなければ不可能である。著者がそのような力量を有しているからこそ、本書において東アジアの全体像が見事に描き出されたと評者は考えている。

第1章は東アジアの成長をどう捉えるか、という課題に対して、見過ごすことのできないこれまでの先達の諸理論が恐らくほぼ全体的に網羅されて言及されつつ、論じられている。とりわけ、第1節「アジア的停滞」から「東アジアの奇跡」へ、第2節「雁行形態」の出現は、まさに国際経済学と開発経済学の理論の宝庫である。例えば、第1節の最初の項「アジア的停滞論」の系譜、という箇所だけでもそのことは良く表れている。「アジア的停滞論」の原型であり、「ユーロ・セントリズム」と（Euro-centrism: ヨーロッパ中心の歴史観）へと繋がる、M. ウェーバーの「エートス」論、K. マルクスの「アジア的停滞論」を始め、戦後の「アジア的停滞論」としてのオランダ人のJ.H. ブーケに代表される「社会経済派」による「二重社会論」、米国人の文化人類学者C. ギアツの「農業インボリューションと貧困の共有」などを取り上げている。また、赤羽裕の「前近代的伝統的社会構造」、R. ヌルクセの「貧困の悪循環」、G. ミュルダールの「軟性国家」(soft state)などが援用されている。

第2章では、まず「東アジアの奇跡」に対する的確で豊富な理論の整理が行われる。国家の役割、「開発独裁」、指導される資本主義、について

考察する過程で、東アジアでは、「開発独裁」、「開発主義」、「権威主義体制」という概念は「キャッチアップ型工業化」とセットになった一般的概念であり、おしなべて「強い国家」の経済的役割が強調されてきた、と指摘している。次に、「東アジアモデル」の限界を考察し、「不均衡開発戦略」の歪み、輸出指向工業化の追求が強いる「組立型工業化」による裾野産業の脆弱性、「開発独裁」の後遺症、について言及している。続いて、アジア通貨危機、構造改革とグローバル化の進展、に関して分析がなされ、「雁行形態的発展」の終焉と「大競争時代」の幕開け、を結論として論じている。

第3章では、まずアジア NIES の成長に果たした日本の役割について、「成長のトライアングル」構造を取り上げ、その内実と変容が考察される。その内実とは NIES が日本からの設備、部品・素材を輸入して組立・加工を行い、最終製品として米国市場へ輸出することによって工業化を実現したことを指し、変容とは「東アジア生産ネットワーク」、米系多国籍企業を中心としたモジュール生産ネットワークへ分業構造が変化したことを示している。同時に、いわゆる「中国脅威論」に対しても批判的考察がなされ、「日本経済の再生にとって、中国の成長活力を取り込むことは不可欠であり、そのためには引き続き中国との Win-Win 関係を維持するとともに、企業間でのビジネス・アライアンスを拡大していくことが重要である」と締め括っている。

第4章では、まず「改革・開放政策」の始まりについて考察される。その背景として、精神主義の破綻、国内経済の疲弊、NIES (NIC s) の衝撃を挙げて詳細に論じている。そして、鄧小平の「先富論」は、NIES と同じく中国における「不均衡成長」戦略の見事な開花と理論付ける。次に、「社会主義市場経済」の矛盾について考察される。「社会主義市場経済」論の提起が「四つの近代化」と関連し、その「四つの近代化」は「社会主義計

画経済」を修正させ、「改革・開放政策」へ導いたことが示される。続いて「社会主義初級段階論」の本質が明らかにされ、中国が目指そうとした「社会主義市場経済論」とは「東アジアモデル」の踏襲であった、と指摘する。今日、中国は無差別的な外資導入政策を終焉させ、選別的な外資導入へと政策転換が行われ、市場経済化の「第三局面」へ移行し、「世界の工場」から「巨大市場」へ変貌しているとされる。中国の開発体制を典型的な「不均衡開発理論」に基づいた「国家資本主義」と位置づけ、それは必ず溶解するというのが、歴史の教訓であると結論付けている。

第5章では、ASEAN の発足に至る経緯から、ASEAN が今日目指している「ASEAN 共同体」へ至る道のりについて、AFTA、「ASEAN 経済共同体」の内実を検討しながら順を追って考察している。「ASEAN Way」のジレンマ、「ASEAN ディバイド」と呼ばれる二重構造問題、ASEAN に強力なリーダーシップを発揮できる国が存在しないこと、これらが「ASEAN 共同体」の実現を疑問視する要因となっていると指摘している。

第6章では、旧ソ連のゴルバチョフ書記長の登場による「北東アジアの夜明け」と「交流時代の幕開け」について述べ、次いで国連開発計画のイニチアチブの下に進められた「図們江地域開発計画」を紹介しつつ、「北東アジア経済圏」の期待と挫折について論じている。期待が挫折に帰した理由として、そもそも期待と現実にギャップがあったこと、北東アジアの特殊性を挙げている。続いて、ロシア経済の混乱とアジア経済危機の波及、朝鮮半島の緊張という「北東アジアの試練」から二国間経済連携の拡大、拡大する人的交流という「北東アジアの新経済地図」が描かれ、「経済連携の新たな課題」が提示される。最後に「日本は改めて、北東アジアでの地域経済協力について真剣に考える必要があるといえるだろう」と結んでいる。

第7章では、東アジアの「制度的地域統合」の

可能性について考察している。まず、地域主義（リージョナリズム）と地域統合に関する概念整理を行いつつ、東アジアでは「東アジア共同体」のような明確な「制度的地域統合」を目指そうとするリージョナリズムの立場と、「東アジア自由貿易圏」といった本来のグローバリズムに基づいた「WTO プラス」の方向を目指そうとする立場が混在している、と述べている。TPPは米国が東アジアに持ち込んだ「くさび」であり、東アジアをいっそう混乱に陥れるもの、と捉えている。日本は上記2つの立場のいずれに立つべきか、また TPP という米国の「くさび」にいかに対処すべきか、厳しい選択を迫られていると指摘する。

終章では、本書全体のまとめとして、失われる東アジアの求心力、定まらない日本の針路、ASEAN 地域統合化の行方、中国の「社会主義市場経済」はどこに向かうのか、日中関係の行方をポイントとして整理し、台頭するインド経済と東アジア、を補充して語っている。

著者は「はしがき」の末尾において、アジア経済の入門書という意識のもとで執筆したため、随所で乱暴な整理を行っていることも十分自覚している。「東アジアモデル」にしても「雁行形態論」にしても、もう少し掘り下げた検討が必要であることは否めないであろう、と述べているが、評者には全くの謙遜のように思われた。評者は「どうせテキストだから」と思って、正直それほど期待せずに読み始めたところ、一気に読みたくなり、読み終えることになった。それは本書が単なる「平板な」テキストではなく、まさに坂田教授の「東アジア論」の真髓（著者が謙遜して言う「乱暴な整理」こそ）がふんだんに込められているからである。

「東アジアモデル」を「国家資本主義」と捉え、中国の開発体制も「不均衡経済発展」に基づく中国式「国家資本主義」であると主張される本書の内容に、著者の独自でかつ透徹した理論の「切れ味」を感じるのには評者だけではないであろう。

本書を読んでもう一つ感じ得るのは、著者の博識である。著者は同じく「はしがき」末尾にて、「本書では、可能な限り注を多く活用することによって読者の関心が広がるように心がけたつもりである」と論じているが、それを可能としたのがまさに著者の博識によってである。

評者は以上のように、全面的に坂田「東アジア論」に敬意と賛意を表しており、また評者が著者の著作を論評する立場にはないのだが、敢えてコメントすれば次の点である。

まず、中国を「国家資本主義」として把握する際に、やはり本書がテキストであるという性格を勘案するならば、国家資本主義そのものの概念整理とそれを中国に適応する諸研究（例えば、加藤弘之、大西広など）の整理を簡単にでもする必要があったように思われた。また、中国国家資本主義論批判の立場に立つ研究（例えば、井手啓二など）も紹介しておく必要があったのではないだろうか。

次に、北東アジアの地域経済協力について、北朝鮮に関する記述が殆ど見られないことに関してである。北東アジアの平和と繁栄において、北朝鮮というファクターは無視できないのであるから、同国経済の歴史的規定と現状および中朝、口朝の経済交流と地域経済協力について、著者なりの見解を読者は欲するのではないだろうか。

最後に、確か著者は比較的以前の論考（「東アジア地域経済連携の現状と日本の選択」）で、日本の選択としてグローバリゼーションの潮流には抗えないから、日本政府は TPP 交渉参加への英断を下すべきであると論じていたことと、本書第7章での論理展開との間にズレがあるように感じて、少し違和感があった。これは評者の読み方が誤っているかも知れない。また、学術専門書とテキストという書物の性格と目的から生じたものかも知れないとも考える。

しかし、実は評者が最も感心して惹き込まれて読んだ章がこの第7章であった。東アジアを取り

巻くグローバリズムとリージョナリズムのウェーブの本質を見事に捉え、近視眼的ではなく将来を見据えた深慮な考察力に感嘆した。巷の「東アジア共同体」論の肯定派・推進派の論考には多分に理想的理念が先行し過ぎている観が歪めないが、著者の視線は冷静でかつ鳥瞰している。

アジア経済を学ぶ初心者は勿論のこと、一線の研究者たちにとっても大いに刺激を受ける著作である。是非一読を進めたい。

## 北東アジア学会第19回学術研究大会プログラム

と き 2013年9月21日(土)、22日(日)  
 ところ 島根県立大学浜田キャンパス  
 開催校 島根県立大学

### プログラム

#### 1日目 / 2013年9月21日 土曜日

- 14:00- あいさつ 【講義・研究棟1階「大講義室1」】  
 大会主催校 飯田 泰三 (島根県立大学副学長)  
 学会会長 佐渡友 哲 (日本大学法学部教授)
- 14:10- シンポジウム 【講義・研究棟1階「大講義室1」】  
 「北東アジアにおける地域連携構造の衝突——日中韓 FTA と TPP をめぐって」  
 報告 中島 朋義 (公益財団法人環日本海経済研究所主任研究員)  
 「東アジア経済統合と TPP - 日中韓の視点から -」  
 楊 飛虎 (江西财经大学教授)  
 「公共投資の适度規模と経済绩效研究——基于中日韩的实证研究」  
 任 千錫 (建国大学教授 / 韓国東北亜経済学会前会長)  
 「韓国の FTA 政策と韓中日 FTA」  
 コーディネータ  
 大西 広 (慶應義塾大学経済学部教授 / 北東アジア学会副会長)

-18:00 終了

18:30-20:00 懇親会 【学内レストラン「ビューライン」】

#### 2日目 / 分科会 / 2013年9月22日 日曜日

開始	終了	題 目	コメンテータ	教 室
		<b>A-1 サブリージョンの形成と協働—メコン川地域秩序と中国の存在</b>		講義棟1階「小講義室3」
		司会・討論：佐渡友 哲 (日本大学)		
9:00	9:40	吉川 健治 (東洋英和女学院大学)：サブリージョンの視点		
9:40	10:20	峯田 史郎 (早稲田大学アジア研究機構招聘研究員)：メコン川流域地域」開発とサブリージョンの再定義		
10:20	11:00	森川 裕二 (富山大学特命助教)：中老関係と国境周辺地域形成		
		<b>B-1 中国の経済 (中国語可)</b>		講義棟1階「小講義室4」
		座長：松野 周治 (立命館大学)		
9:00	9:40	陳 乃佳 (島根県立大学北東アジア開発研究科)：中国における金融自由化の新動向について—民間金融の勃興を中心に—	吉田 真広 (駒澤大学)	
9:40	10:20	孫 啓明 (中国郵電大学)：中国经济的转型压力及其两难选择	白 權鎬 (嶺南大学)	
10:20	11:00			
		<b>C-1 経済史関連</b>		講義棟1階「小講義室1」
		座長：林 裕明 (島根県立大学)		
9:00	9:40	藤田 法子 (大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程)：日中経済交流史～戦後の関西の取り組みを中心に～	林 堅太郎 (立命館大学)	
9:40	10:20	齊藤 久美子 (和歌山大学経済学部)：ロシアにおける会計の変遷と現段階の課題	洪 慈乙 (山形大学)	
10:20	11:00	ハス (昭和女子大学大学院生活機構研究科博士後期課程)：戦前の内モンゴルにおける知識人とチンギスハーン信仰について	岡 洋樹 (東北大学)	

<b>D-1 貿易と国際分業</b>			講義棟1階「小講義室2」
座長：劉 敬文（桜美林大学）			
9:00	9:40	龍 世祥（富山大学経済学部）：循環型分業のフラクタル構造—北東アジアを事例に—	竹味 能成（金沢学院大学）
9:40	10:20	山本 雅資（富山大学極東地域研究センター）：The effect of cost fluctuation on waste trade and recycling in East Asia	青木 卓志（金沢星稜大学）
10:20	11:00	朱 美華（東京大学大学院農学生命科学研究科院生）・荒木 徹也（東京大学大学院農学生命科学研究科）：中国のコールドチェーン（Cold Chain）の実態と課題—冷凍食品を対象に—	龍 世祥（富山大学）
<b>A-2 東アジアの国際関係</b>			講義棟1階「小講義室3」
座長：若月 章（新潟県立大学）			
11:10	11:50		
11:50	12:30	松村 史紀（宇都宮大学国際学部）：中ソ同盟の共同防衛体制 —東アジアにおける同盟の東西比較という視点から—	高橋 和（山形大学）
12:30	13:10	児玉 修（山形大学大学院社会文化システム研究科院生）：冷戦初期英米の対東南アジア政策とその影響～脱植民地化のプロセスを事例に～（仮題）	高橋 正樹（新潟国際情報大学）
<b>B-2 中国の財政（中国語可）</b>			講義棟1階「小講義室4」
座長：唱新（福井県立大学）			
11:10	11:50	朱 永浩（環日本海経済研究所）、李 紅梅（新潟大学）：中国東北地域の経済発展と財政運営に関する分析	張 忠任（島根県立大学）
11:50	12:30	孫 東昇（中国河南理工大学経済管理学院）：中国の公共財政改革と問題点	楊 飛虎（江西財經大学）
12:30	13:10	張 忠任（島根県立大学）：中国の政府間財政関係の実証分析	関口 浩（法政大学）
<b>C-2 計量、産業、地域</b>			講義棟1階「小講義室1」
座長：小川雄平（西南学院大学）			
11:10	11:50	劉 立至（長崎県立大学大学院経済学研究科院生）、尹 清洙（長崎県立大学経済学部）：産業構造の変化と技術進歩がエネルギーインテンシティーに与える影響～中国を例として	大西 広（慶應義塾大学）
11:50	12:30	杜 華（東洋大学大学院）：地域経済における産業集積の形成及び影響—中国陝西省の上場企業を事例として—	竹味 能成（金沢学院大学）
12:30	13:10	穆 堯芋・新井 洋史（環日本海経済研究所研究員）：中国における地域発展戦略の策定プロセス—日本との比較を念頭に	松野 周治（立命館大学）
<b>D-2 韓国経済</b>			講義棟1階「小講義室2」
座長：金 美徳（多摩大学）			
11:10	11:50	姜 喆九（培材大学）：日本の電子産業の発展（日本語で報告）	尹 明憲（北九州市立大学）
11:50	12:30	尹 清洙（長崎県立大学経済学部）、李 鎮勉（韓国産業研究院）：韓国の多地域間経済の相互依存に関する計量分析	白 權鎬（嶺南大学）
12:30	13:10	縄倉 晶雄（明治大学院生）：1990年代韓国における農業政策の転換：親環境農業の社会ネットワークに対する影響	宮島 美花（香川大学）

<b>A-3 北東アジアの政治経済学</b>			講義棟1階「小講義室3」
座長：尹 明憲（北九州市立大学）			
14:10	14:50	笹岡 雄一（明治大学大学院ガバナンス研究科）：北東アジアへのアセアン協調の波及可能（蓋然）性	高橋 正樹（新潟国際情報大学）
14:50	15:30	吉田 真広（駒澤大学経済学部）：北東アジア諸国の国際収支と国際収支の発展段階説	川本 忠雄（下関市立大学）
15:30	16:10		
<b>B-3 中国経済とTPPの理論問題（英語）</b>			講義棟1階「小講義室4」
座長：林 堅太郎（立命館大学）			
14:10	14:50	劉 瑞（中国人民大学）：中国新一轮城镇化进程给中国经济未来带来的机遇与挑战。	
14:50	15:30	孟 捷（清華大学）：中国改革开放以来劳动力商品化和雇佣关系的发展	
15:30	16:10	大西 広（慶応義塾大学）：TPPと理論経済学	
<b>C-3 中国経済（英語、中国語）</b>			講義棟1階「小講義室1」
座長：			
14:10	14:50	赖 小琼（厦門大学王亜南経済学院教授）：中国の生産能力過剰について（中国語で報告）	尹 清洙（長崎県立大学）
14:50	15:30	居爾寧（内モンゴル財経大学）：内モンゴルの経済発展過程について	巴特尔（多摩大学）
15:30	16:10		
<b>D-3 北朝鮮</b>			講義棟1階「小講義室2」
座長：今村 弘子（富山大学）			
14:10	14:50	三村 光弘（環日本海経済研究所）：朝鮮民主主義人民共和国の新政権の経済政策	川口 智彦（日本大学）
14:50	15:30	李 燦雨（帝京大学短期大学現代ビジネス学科）：中朝の鴨緑江下流地域開発の歴史的継承性と差別性	三村 光弘（環日本海経済研究所）
15:30	16:10	崔 穎麗（島根県立大学院生）：金日成の領導芸術とその影響—金日成の回顧録『世紀と共に』を素材として—	轟 博志（立命館アジア太平洋大学）